

米田信寿氏所蔵品の調査

飛鳥資料館

飛鳥資料館では、奈良県御所市の米田信寿氏のご好意により、氏が所蔵する遺物を調査する機会を得た。調査したのは、市内出土と伝える鏡、筒形銅器と灰釉壺である。

鏡は全体的に錆化が著しく、鈕孔の周縁は若干磨滅している。また、内区文様の一部が欠損し、そこから鈕座にそってひびが入り変形している。面径15.1cmを測る中国製の六獣鏡（後漢）で、内鈕座と内区主文様の間には、「石氏乍竟真大工□□□□知老予・」と15字からなる右回りの銘文があり、類例から欠けている部分を推定すれば、「石氏作鏡真大巧上有仙人不知老予」と復原できる。内区主文様は六個の円座乳の間に細線で表現した右向きの鳥、龍、虎などを配している。その外には櫛歯文帯がめぐり、一段高くなった外区の外向鋸歯文帯、流雲文帯となる。内区主文様の鳥から櫛歯文帯にかけては、筧がつぶれ気味になっている。

筒形銅器は、上端が一部欠けてはいるが遺存状態は良好で、完形に近い。長さ14.2cm、底部径3.0cm、上端径2.3cmを測る。底面は、やや中高になっており、四方向に長方形の透しが上下二段に入る。上端から2cmのところに対する2個の目釘孔がある。長さ7.6cm、長径0.6cm、短径0.5cmの青銅製の棒を伴う。

灰釉壺は、高さ4.0cm、口径1.9cm、底径2.7cm、胴部最大径4.5cmを測る台付の小壺で、口縁から肩にかけて灰釉がかかっている。

青銅製品については、遺物処理研究室において、蛍光X線分析を行なった。その結果、いずれも主成分として、Cu、Sn、Pbが検出された。また、SnとPbのCuに対する比から求めた回帰分析によれば、今回の試料では、鏡にSnが最も多く、筒形銅器もやや多い、しかし、青銅の棒の場合はこれらの製品よりSnが少ないという結果が得られた。なお、回帰分析の結果、鏡は従来から指摘されている中国鏡に多く見られるパターンを示すことも明らかになった。

灰釉壺（上）・六獣鏡（下）

筒形銅器・青銅の棒

（小林謙一）